

付録 I

梵文法華經写本研究略史覚書

1. 梵文法華經写本の系統

パリのアジア協会は、ネパール王国駐在のイギリス弁理公使ブライアン・ヒュートン・ホジソン (Brian Houghton Hodgson, 1800–1894) から1837年末までに多数の梵語写本を受け取った¹。その中に法華經の紙写本があり²、ユジェーヌ・ビュルヌフ (Eugène Burnouf, 1801–1852) は、これを底本として法華經の仏語訳 (*Le Lotus de la bonne loi*, Paris 1852) を完成させた (1839年)³。ビュルヌフ死去の年にこの仏語訳が出版されて、150年以上の歳月が経過したが、これまで彼の仏語訳に関して十分な研究が行われてきたとは言いがたい。ヘンドリク・ケルン (Hendrik Kern, 1833–1917) の英語訳 (*The Saddharma-puṇḍarīka or The Lotus of the True Law*, Oxford 1884) についても同じことが言える。これらの仏語訳、英語訳の内容の解明のためには、底本となった写本と参照された諸写本だけでなく、すべてのネパール系写本の系統を可能なかぎり明確に区分しておくことが前提となる⁴、と筆者は考える。

ケルンは、英語訳の底本として使用したケンブリッジ大学図書館所蔵の2つの貝葉写本C3とC4が異なる系統に属することに気付いていたが⁵、ネパール系諸写本をグループに分けるという発想には至らなかった。南條文雄 (1849–1927) は、ネパール系諸写本はすべて同一系統のものと考えていた⁶。彼らのこのような見解は、多分に時代的制約によるものであると筆者は考える。当時使用可能であった写本その他資料の数量が現在と比較すれば極端に少なかったことを考慮すればやむを得ないことであった。このことによって彼らの業績の重要さが損なわれることはない。

2. ヴィリー・バルフと渡辺照宏

梵文法華經のテキスト研究、および信頼性の高い校訂本完成への道程という視点から、特筆すべき研究成果を残した研究者として筆者は2人の名を挙げたい。その1人はヴィリー・バルフ (Willy Baruch, 1900–1954) である。彼の出発点は「ケルン・南條本」であった。彼は、その刊本の校合が不十分で、その脚注も杜撰なことを知り⁷、また、1934–1935年に出版された『改訂梵文法華經』⁸もその資料的価値が十分でないとして、14本のネパール系写本⁹を校合し、これらに代わる新たな校訂本の原稿を完成した。それは印刷を待つばかりであっ

たが出版されることはなかった¹⁰。筆者は、テキストの伝承(Textüberlieferung)という視点から、ネパール系写本のグループ(Group)分けの可能性を本格的に検討した最初の人バルフであると、考える。しかし、彼は「ケルン・南條本」の脚注があまりにも恣意的で、一貫性を欠いていたので、その可能性の探求を断念した¹¹。

もう1人は、渡辺照宏(1907-1977)である。彼は旧友バルフに触発され¹²、3本の論文を発表した¹³。彼はそれらの中で、妙法華、正法華、チベット語訳を参照しつつ、ネパール系諸写本、ギルギット本、西域系諸写本にみられる異読を詳細に検討し、次のように書いている。「このように比較してみると、Kha本とP本とが一致することが多いが、必ずしもそうとは限らず、その一方が孤立することもあり、[第1章(序品)]第50頌dの如くG本、Kha本、正法華の一群とネパール系諸本、P本、妙法華の一群とが対立し、チベット語訳はどちらとも関係するというような例も出てくる。随って個々の例を見てX本とY本とは近いとか遠いとかいう議論をするのは見當違いである。ネパール系寫本の間でさえも個所によって異同の仕方が同一ではなく、MSS を分類することは困難というよりも不可能に近い。ある個所ではAとB、CとDが一致するが、別の個所ではAとC、BとDというような組み合わせが出てくるからである。ネパール系、G本、P本、それ以外の西域断片ということになると、どれがどれに近いというような判断をくだすことはできない¹⁴。」しかし、渡辺は、ネパール系写本を法華經研究の土台に据えるべきであり、校訂本の出版を志すならば、数多くの異読を含むネパール系諸写本の全貌を解明することが必要であると考えていた¹⁵。これは卓見であると筆者は考える。

渡辺は「BB本(「ケルン・南條本」のこと)の刊行は確かに功績には違いないが、これを権威として採用したのは法華經研究にとって不幸であった¹⁶」という言葉を残した。彼の言葉は全くその通りである。しかし、この「不幸」も後世この分野の研究にたずさわる者が取り組むべき課題として残されたものである、とプラス思考で捉え直せば、ここを出発点として未来への新たな展望が開けてくる。そして、その目指すべき到達点は、バルフが果たせなかった、新しい校訂本の発刊という構想の実現であることは当然である。渡辺も、将来の新たな校訂本の出現を期待して次のように書いている¹⁷。「私の旧友で H. Lüders の門下 Willy Baruch はその必要に応じるためすでに新しい校訂本の原稿を1937年には完成していると記しているが(Beiträge zum Saddharmapundarikasūtra von W. Baruch, Leiden 1938, S. VII)戦争のため遂に出版の機を見ずに逝った¹⁸。今後の計画のためにも BB 本の長短を反省しておく必要がある。(下線部は筆者)」と。彼自身は、ギルギット本¹⁹の写真版とローマ字版という、「病臥にありながら、10年の歳月をかけての畢生の研究成果²⁰」を世に送り出した。

3. 戸田宏文の業績と新たな校訂本への道

ネパール系諸写本のグループ分けの可能について、渡辺とは異なる視点から²¹、ネパール系写本の全貌を解明するために、戸田宏文は長年、梵文法華經写本の解読とローマ字転写作業に携わってきた。しかし、その道程は決して平坦なものではなく、その業績も一朝一

夕に成ったものではない。1959年から、戸田は松濤誠廉と「ケルン・南條本」を鳩摩羅什の『妙法蓮華經』と照合しながら読み始めた²²。その際、池田澄達(1877-1950)が1926年に刊行した東洋文庫所蔵本(K)のコロタイプ影印版が常時参照された。彼らはこの作業を通じて、「ケルン・南條本」の杜撰さを知り、諸写本との照合の必要性を痛感した。

1966年、戸田は清田寂雲よりカシュガル写本の写真コピーを入手し、これが彼の中央アジア系写本研究に着手する契機となった。1976年までの約10年間、戸田はカシュガル写本とファルハード・ベグ写本の解読に全力を傾けた²³。1976年、ローケーシュチャンドラがカシュガル写本の写真版を出版した²⁴。戸田による中央アジア写本のローマ字転写作業の成果は、1977年から1979年にかけて8分冊で公刊され²⁵、1981年、『中央アジア出土・梵文法華經』として結実した(後注22を参照)。筆者は、この期間を戸田の写本研究の第1期と考える。

1980年から戸田は、Kの解読成果を発表し²⁶、解読と考察の対象を中央アジア系写本からネパール系写本に移していった。中央アジア系古写本の資料としての価値を十分に評価しながらも、最優先で取り組むべきは、完本が圧倒的に多いネパール系の写本を解読することだと判断したからである。1977年から1982年にかけて刊行された『梵文法華經写本集成』(compiled by the Institute for the Comprehensive Study of [the] Lotus Sutra, Rissho University)²⁷は、Pe, P3, StP といった重要な写本が集録されていないという点はあったが、30本の写本を網羅しており、戸田にとってはネパール系写本の全景を展望できる格好の資料となった。ネパール系諸写本のグループ分けは可能であるという彼の思索はこの時期に徐々に熟成していったと考えることができる。その源流は、早くも「梵文法華經考」(1979)に見られるが²⁸、ここでは「グループ」という語でなく、「類」という語が使われている。彼が、ネパール系諸写本の分類という意味で「グループ」という語を使用するのは、「梵文法華經考——その二」(1984)以後である²⁹。この頃から、戸田の研究の第2期が始まったと考えられ、ネパール系諸写本のグループ分けが可能であることを証明するための研究活動が本格的に開始された。その成果は、1984年以降の刊行物を精読すれば明らかである³⁰。筆者は、2000年頃までを戸田の写本研究の第2期と考える。

写本研究の第3期は2001年から始まると考えられるが、戸田は今後の課題について次のように述べている³¹。「まず、写本を正確かつ厳密に読むことである。その後、グループ別のテキストを確定する。貝葉本では、C3, C4, N1 が解読されねばならず、紙本では、R, P1, P2, P3 および T8, W, StP が解読されるべきであろう³²。さらにチベット語訳テキストの確定も必要である。」

信頼性の高い梵文法華經の校訂本の完成と出版という到達点は遥かな彼方にあるが³³、東洋哲学研究所編纂による「法華經写本シリーズ」の刊行は、前述の2人の先達の遺業を受け継ぎ、構想実現に向けての確かな第一歩であると、筆者は心より確信する。

注

1. Burnouf (1844, pp.1-5). なお湯山明によれば、「ホジソンから、法華經を含む24点の梵語仏典がパリに届いたのは1837年4月20日頃」であるという。湯山 (1968, p. xxv; 1994, p. 65; 1998, p. 35ff.) を参照のこと。なお、湯山 (1994) の全面改訂版 (entirely revised version) が英文で発刊されている。湯山 (2000, p. 61) を参照。

2. 本書の略号P3.

3. 湯山 (1994, pp. 68-70; 2000, pp.62-64) に述べられているように、ビュルヌフが法華經を仏語に訳している時、彼が見ることのできた写本はP3のみであった。その後、3本の紙写本 (P1, P2, R) を参照することができたが、それは仏語訳の完成 (1839年) 後、訳注 (notes) を作成する時であった。なお、仏語訳の経緯については、湯山 (1994, p. 65ff.; 1998, pp. 35-36; 2000, pp. 61ff.; 2001, pp. 350-351) も参照のこと。ところで、ビュルヌフは、フコー (Philippe Édouard Foucaux 1811-1894) の協力を得て、法華經のチベット語訳を参照し、その一部を仏語訳に採り入れている。シモンソンと渡辺は、それぞれこの事実に言及している。Simonsson (1957, pp. 64-65) および渡辺 (1969a, p. 103; 1974, p. 28; 1975, Introduction, p. x) を参照のこと。戸田もこの事実を指摘している。戸田 (2000, p. (1); 2000a, p. 63; 2001, p. xxii) を参照のこと。また、Burnouf (1844, Notice de M. Barthélemy Saint-Hilaire sur les travaux de M. Eugène Burnouf, p. XXVI) の 5° “Enfin des extraits tibétains de diverse étendue qui devaient servir à éclaircir plusieurs passages du Lotus de la bonne loi” (5° 「最後に、Lotus de la bonne loi のいくつもの文の一節を解明するのに役だったに違いない広範な数々のチベット語の抜粋文」) との記述は、彼らの言及に根拠を与えている。しかし、それが仏語訳全体の中でどの程度のものであったかについては全く不明である。なお、シモンソンについての教示をいただいた創価大学国際仏教学高等研究所辛嶋静志教授に感謝いたします。

4. 仏語訳、英語訳のために使用された写本は、すべてネパール系写本であるという事実留意する必要がある。渡辺 (1975, Introduction, p. x) を参照。

5. “The difference between both is not very great; yet there can be no doubt that the second MS. belongs to another family.” Kern (1884, Introduction, p. xxxviii) を参照。なお、ここでケルンが言う family という用語は、group という意味に理解できる。

6. “But after all, all the MSS., I ever used, belonged to the same family of the texts, . . .” Kern and Nanjio (1908-1912, p. II). “Alle sechs Handschriften faßte Nanjio als zu einer einzigen Familie gehörend auf.” (「南條は、6つの写本がすべて1つの系統に属するものと考えた。」) Baruch (1938, p. 7).

7. Baruch (1938, pp. 7-12).

8. Wogihara and Tsuchida (1934-1935).

9. Baruch (1938, pp. 1-4) これらは、本書の略号のA1, A2, A3, B, C1, C2, C3, C4, C5, C6, K, P1, P2, R に相当する。湯山 (1968, p. 11, fn. 8) も参照のこと。なおバルフは、8種類の東大写本 (本書のAbbreviations のT2, T3, T4, T5, T6, T7, T8, T9 に相当) の最初と最後の2葉の写真だけは見ている。それらの写本の中で “Die Hs. Nr. 52, die lange Zeit für verloren galt, wurde bei dieser Gelegenheit von Herrn Prof. Fukushima wiederaufgefunden.” (「No. 52 (T6) は、紛失したと長い間思われていたが、福島先生 (Herrn Prof. Fukushima は辻直四郎 (1899-1979) のこと、なお p. IX の

Fushima は Fukushima の誤植である) によって 見つけだされた」と記している (Baruch (1938, p. 5)). 下線は筆者。この事実をご教示いただいた戸田宏文徳島大学名誉教授に感謝いたします。

10. Bechert (1972, p. [10], fn. 6). Hinüber (1982, p. x).
11. Baruch (1938, p. 12).
12. 渡辺 (1966, p. 359).
13. 渡辺 (1966, pp. 359–389; 1969, pp. 59–78; 1970, pp. 77–110) を参照のこと。
14. 渡辺 (1969, p. 76). 渡辺 (1970, p. 81; 1970a, p. 106; 1971, p. 61) も参照のこと。
15. 渡辺 (1975, Introduction, p. x).
16. 渡辺 (1969, p. 77).
17. 渡辺 (1966, p. 359).
18. 注10 および湯山 (1998, pp. 43–44), Jamieson (2002, pp. xix–xx) を参照。なお、湯山 (1972, p. 6) にバルフが校合したノートの日次 (Inhaltsverzeichnis) が記されている。
19. 渡辺 (1972; 1975)。戸田は、書評で「本書の出版に依って、我国の仏教梵語原典研究が世界的な水準にまで高められたと言い得よう」と記している。戸田 (1980, p. 112).
20. 戸田 (1980, p. 106).
21. 戸田 (1984, p. 142 [HS in Appendix II]; 1997, pp. 15–16) を参照のこと。なお、戸田 (1997) を提供していただいた佛教大学総合研究所の松田和信教授に感謝いたします。
22. 戸田 (1981, 1983, Preface).
23. この期間の成果として戸田 (1969–1976)がある。
24. Lokesh Chandra (1976).
25. 戸田 (1978; 1977–1993, I–VII) [SK, BD I–VII in Appendix II].
26. 戸田 (1980a; 1977–1993, VIII–XI) [SN, BD VIII–XI in Appendix II].
27. Institute for the Comprehensive Study of [the] Lotus Sutra, Rissho University は、1977年から1982年までに第1巻から第12巻まで刊行。第13巻 (Fragments of MSS), 第14巻 (Concordance), 第15巻 (Index) は未刊。
28. 戸田 (1979a, pp. (19)–(20)) [BH-1 in Appendix II] を参照。
29. 戸田 (1984, pp. (1)–(2)) [BH-2 in Appendix II] を参照。
30. 戸田は、ネパール系写本の分類に関する一連の研究成果を発表している。戸田 (1984–1993; 1994–1999; 1994–2002) 等。Appendix II を参照。また戸田 (1997, pp. 15–16) も参照のこと。
31. 戸田 (1997, p.16).
32. 1997年以降の戸田の研究は、渡辺の研究の視野の外にあった紙写本も視野に入れ、可能な限りの分類を試みるという精度の高い内容となっている。湯山 (1998, pp. 40–43) も参照のこと。
33. 渡辺は、彼のギルギット本の位置づけについて次のように書いている。“The present volume, therefore, is intended to be *addenda* and *corrigenda* to the Kern-Nanjio edition of the *Saddharmapundarika*.” 渡辺 (1975, p. xv).